

# 幕末期宇和島藩の動向(5)

——伊達宗城を中心に——

三 好 昌 文

前号(第11巻 第3号)

2 嘉永6年ペリー来航～万延元年3月桜田門外の変

A) ペリー来航～日米和親条約の締結

ウ) 村田蔵六と大野昌三郎

エ) 宇和島藩の軍事改革

オ) 条約調印後の雄藩大名と宗城

本号

カ) 安政2・3年における攘夷派大名

キ) 薩摩藩士田原直助らとの交流

ク) 在府中の伊達宗城

ケ) 宇和島藩の蒸気船建造

B) ハリスの来航と日米修好通商条約の締結

ア) ハリスの来航と攘夷派

## カ) 安政2・3年における攘夷派大名

米英露蘭の各国との和親条約の調印後、事実上の貿易が行われ、攘夷派大名、とくに徳川斉昭・松平慶永・伊達宗城らの攘夷論は観念論に過ぎない傾向を見せている。かれらとても、攘夷態勢の確立のためには貿易を黙許する富国強兵論を採用せざるを得なかった。宇和島藩では、藩主権力を強化しながら、とくに慶永との提携を深めて幕閣に対する影響力を保ち、幕政改革と藩政改革の両者を並行して推進しようとする。しかし、現実には天災による財政難のなかで、その主眼である軍艦建造と砲台の建設は、宗城の構想よりはるかに後退していく。

安政2年(1855)6月7日、慶永宛宗城書翰では<sup>1)</sup>蝦夷地、箱館防衛の必要を説き、川越藩主松平直侯(齊昭8男昭融、同年8月13日襲封)を「英才末頼母敷」とし、「阿兄依旧之由」と阿部正弘を批判し、福岡藩主黒田長溥は「一頃より病身になり、志も弱薄に至候様子」とされている。長溥はペリー来航時から積極的な開国論を主張し、慶永らの有志の勢力は弱化の傾向を見せていた。宗城は軍艦製造は「小振之雛形<sup>二間</sup><sub>余</sub>」を製造して後に中止とし、略製の8間程の蒸汽船は建造するつもりだと述べている。前者が村田蔵六の軍艦雛形、後者が前原巧山の国製蒸汽船(雛形)である。

同月20日付慶永宛書翰では<sup>2)</sup>藩財政の窮迫を告げ、「閣中之売国論」が卓越し、齊昭の建白も採用されず、「花旗奴数十隻渡来」の時には敗退の外ないという。宗城は悲憤慷慨するばかりである。7月2日、藩では威遠流ボート車2台を製造することにしている<sup>3)</sup>。

7月5日付慶永宛書翰では<sup>4)</sup>藩船天龍丸が下田港でアメリカ軍艦・商船2艘を目撃し、九州へも英仏艦の渡来が予想され、蘭は蒸汽船1艘(スンピン号)が幕府に献呈された見かえりとして、銅・蠟が充てられ、その量は10万斤とされ、宇和島藩が浪華に送った蔵蠟がこれに充当されるという噂を伝えている。また、「去今四年前、家僕蜂字書生へ相下置、其者ヨリ軍艦製造之家僕へ一昨年秋相渡候書物」、つまり蘭書「ハンデリンクドットデケンニスハンヘットシキップエンデスセルフストイグ」(1838年、著者イセピラール、「軍艦製造総説並諸具総説」)を完訳するため恩借を願っている。宗城は軍艦建造を断念したわけではなく、「何分早ク大軍艦実物造度候得共」、「尤追々両三艘造候含ニテ候得共」と大言している。同月14日、城下を始め藩領は大暴風雨のため大被害をうけた<sup>5)</sup>。

7月22日付慶永宛書翰では<sup>6)</sup>下田港の玉泉寺で事実上の交易が行われているとの慶永の密話に接し、宗城は「夷奴輕蔑追日相募、吾威追日失墜、夷賂投機、貪吏趨事不可為之秋ニ至候」と述べ、交易品中に廃銃といってもよいステイン剣筒・洋書・オルゴール等があることを知った。

同2年8月10日付慶永宛書翰では<sup>7)</sup>在国中の宗城が在府中の慶永の活動に

例のように期待すると同時に憤懣を漏らし、風説書等の情報の入手を懇願している。慶永が「当節蘭持渡キナソート四瓶、ヒヨシヤモスエキス御取入、此外蘭書二十四部計御取入之由」と聞き羨望し、宇和島藩の蘭書購入はままたらぬと述べている。福井藩では蘭式教練も伝習しているが、宇和島藩では進行せず、「僕も家来へ為習度奉渴望候」と述べている。宗城は洋式軍事の摂取を熱望し、幕府では下曾根金三郎を中心に、「公辺モ西洋流学候様御触御座候」と研究が進んでいることを喜ぶ。

同年9月4日付慶永宛書翰では<sup>8)</sup>慶永への返信として、徳島藩主蜂須賀斉裕(将軍家斉子)は軍事改革に積極的であったが、「阿州ハ去年より一層無志ニ至候段、立花(○鑑寛)<sup>かねひろ</sup>へも御尋被成候処、夷虜攘遏論ハ尤無之、頭道話も無之由」と有志から遠ざかったことを知っている。「彼地(○長崎)扨に而ハ肥築両将(○鍋島直正・黒田長溥)不堪憤痛、最早一戦有之候ハ、重畳と奉存候」と、英仏との開戦によって佐賀・福岡両藩を奮起させようという“暴論”を展開している。8月14日、幕府は斉昭に再び幕政参与を命じたが、頹勢の挽回は容易ではなかった。鳥取藩主池田慶徳(斉昭5男)は尊攘派大名と目されていたが、有志とは離反して藩内抗争が拡大する。宇和島では、9月6日、猪越で米国式大砲ホートホキッスル3門の試射、重量1貫目余で10匁玉160を包含する葡萄弾を発射し、3丁の距離で弾丸を飛散させることに成功している<sup>9)</sup>。樺崎砲台と関係があるろう。

10月2日、安政大地震が発生し、江戸藩邸・国許とも甚大な被害を受けた<sup>10)</sup>。8日宗城は老中阿部正弘に呈書した。地震による下田港の被害、プチャーチンに応接の筒井政憲・川路聖謨(勘定奉行兼海防掛)の無事を述べ、「如此大譴有之段、畏懼敬慎之時ト存候」と、度重なる天災のなかで、禁闕造営を立派にせよという。10月9日、老中首座は佐倉藩主堀田正睦に交替している。

10月26日、蜂須賀斉裕に呈書している<sup>11)</sup>。この書状は、安政2年段階における宗城の時局観・人物論をよく表現している。前年閏7月、英国使節スターリングの長崎来航以来の外交問題について、徳川斉昭と幕閣との間に「兎角水ト閣

ト之間純熟無之由」,「御軍制御改正之事計ニモ有御座間敷」と、軍制改革のみならず、時局に対する見解の基本から「立論黒白不同」の策論が出ると、宗城は認識している。「同公モ只今ニ而ハ打払モ不出来と被申」,斉昭の攘夷論の後退を指摘し、宗城は「兼而之模様とハ言行一致ト難申御人」と批判もあるとする。だが、宗城は「老公胸裡ハマサカ左様ニハ無御座、依旧確乎被期必戦候御卓論ニ御座候事」とあくまで期待を捨てない。「必戦之標的難相立候而者、大和魂ハ不振事、痛嘆々々泣血仕候」と述べている。幕閣のみならず、御三家、溜間詰の譜代大名の奮起を期待し、外様大名の家格を越えた発言を繰り返すのである。

人物評は、水戸藩主徳川慶篤について「人望有之御方」,「御至忠英偉之御質」とし、その藩論統一（家老結城朝道ら門閥派の抑圧）を評価している。尾張藩主徳川慶恕（慶勝）も「至極御忠切、且御国政モ御骨折ニ而、近来増御有志之様存上候」とされている。外様大名は「国内衰弊ニ成行候而ハ、如何ニ大家之細川、萩、佐賀、黒田等、先キ々々如何成行可申哉」と藩財政を心配し、経費節減策として、幕府が献上物を始め参勤交代の免除をすべきと提言する。「当熊本（○藩主細川斉護）・長州（○藩主毛利敬親）防禦之将師ニ当リ兼候人ト、窃ニ御見拔被成候得共」,「松内蔵（○岡山藩主池田慶政）モ同様之人物ニ御座候」と、外様雄藩大名中で攘夷論を抱く者についても、軍事改革・江戸湾警備等についての姿勢を弱体視している。島津斉彬は「当時屈指之英明」と高く評価され、「人物見定不被申内ハ、決而右等（○薩摩・琉球問題）之密話ハ不被致、謹慎深キ人物故、外面より（○藤堂高猷、攘夷派）ヨリ論説ニ可有御座、中々左様ニハ無之、天朝公辺之御為ハ勿論、万端殊之外杞憂痛悶ニ御座候」と援護している。高猷の子大学（藤堂高潔、夫人は蜂須賀昭順女）についても、「至而温順、且万事行届キ候方ニテ、文武勉励、随分有志ニ御座候」とし、川越藩主松平直侯（<sup>よし</sup>斉昭8男昭融）も「年若ナガラ英偉之質」,「同席（○大広間）之方屈指人物」と期待されている。ここで、一橋慶喜が取り上げられていないのは、この段階では宗城らには、まだ將軍継嗣問題が政局の第一義と認識されて

いなかったことを示している。論議の中心はまだ攘夷論にある。

同年10月27日付松平慶永宛書翰では、<sup>12)</sup>「花旗舶今ニ渡来無之」(○ハリス来航の遅延か)、その理由は華盛頓(ワシントン)における政争(大統領選挙とその交代)にあると考えている。斉彬が軍艦太平丸(昇平丸)を幕府に献上した件で批判があることについて、慶永は「貴兄又麟(○麟州, 斉彬)と如御兄弟御親交」あり、「小子又莫逆之厚交之中ニ而」と心配している。また、江戸の大地震を天譴とし、しかし、「外患之義は実ニ頭燃之事ニ而、弥益武備整不相成候半而者難相叶、却而当今転禍為福之所置あらまほしく奉存候」と、福井城下の大火、安政大地震の惨禍のなかでなお攘夷策を強調し、「太平之弊風掃除之時」と捉え、斉昭・脇坂安宅にもこの意志を伝えたという。慶永・宗城の攘夷第一主義を一步も譲ろうとしない姿勢が認識できる。幕閣ではこれに対抗する形で、佐倉藩主堀田正睦が溜間詰から出て老中首座となり、彦根藩主井伊直弼が溜間筆頭として、阿部正弘の中道路線に揺さぶりをかけようとしていた。幕閣内の人事の秘密は慶永・斉彬には分からず、「阿閣・牧閣(○牧野忠雅)之所存より出候事かと考察、且ハ井掃姦侯之色々政事を密言上候故」と、直弼の工作与推察する。慶永はとくに、日米和親条約第11条附録条約第13条を米国の下書を丸呑みにて翻訳したものとして、日米の対等性が無視されたと考えている。

同年11月5日慶永宛書翰では、<sup>13)</sup> つぎの蘭書を慶永の注文として正弘に購入依頼するよう頼んでいる。

#### 覚

- |                             |      |
|-----------------------------|------|
| 一、ハントブックデルオントレードギンデファンデンメンス | 壱部二冊 |
| 但解体書、ボック著述、千八百四十年版 但図一冊添    |      |
| 一、ハントブックオーフルデフルバンドーレー       |      |
| 但巻木綿ノ事ヲ記タル書、ビュルゲル著、千八百五十年版  |      |
| 一、オペラティーフエヘルキュンデ            | 壱部三冊 |
| 但外科書、オンセイルト著述、千八百三十五年版      |      |
| 一、ケレイグスキュエンデイゲシケイキュンデ       | 壱部一冊 |
| 但分離書、千八百四十年版                |      |
| 一、エーンセイルウキンドエンストルムカールト      | 壱部一冊 |

- 但風并波濤ノ図, 千八百五十四年版
- 一、地図 壹枚
- 一、プラクティカーレゼーファールト 壹部二冊
- 但航海ノ書, ピートル著述, 千八百四十二年版
- 一、ヘットシキップ 壹部一冊
- 但船製造ノ原因, 航海並船ノ種類ノ説話ノ書, アブビング著, 千八百五十年版
- 一、砦築方ノ図 但千八百四十六年版 壹枚
- 一、ケレングスキュンティゲレールキュルシュスアルテルレリト 壹部一冊
- 但砲術書, ファンオーフルスタアテン著述, 千八百五十年版
- 一、フルロスキュンデアフベールディンゲン 壹部二冊
- 但産科図解, マイグリール著述, 千八百五十年版
- 一、ハンドブックデルスチュールマンスキュント 壹部一冊
- 但航海書, ホムディケル著述, 千八百四十三年版
- 一、ハントレイディングトットデレールデルゲ子ースミッテレン 壹部一冊
- 但藥製書, ペレイラ著述, 千八百五十四年版
- 一、和蘭語辺エケレス語対訳辞書 壹部二冊
- 但ボムホフ著述, 千八百五十一年版
- 一、カタルキュス 壹部一冊
- 但和蘭フランス其外ノ書銘ヲ記タル書
- 一、キュンスト辞書 壹部一冊
- 但ウエイラント著述, 千八百四十六年版
- 一、フルハンデリングオーフルデセイルシケーベン 壹部一冊
- 但帆前製造書, ファンデンスベッキ著述, 千八百四十二年版, 但図一冊添
- 一、エンシリジョンタデキウム 壹部一冊
- 但医書, ヒュフエランド著述, 千八百四十一年版
- 一、アルゲメーンミリタイレサックウヲールデンブックインデデリータレン 壹部一冊
- 但和蘭語フランス語ドイツ語兵学袖珍辞書, レグレイト子ル著述, 千八百三十九年版
- 一、プラクティカーレゼーファールトキュンデ 壹部二冊
- 但航海ノ書, コムテ著述, 千八百四十二年版
- 総計二十部

以上の洋書を見ると、宗城は比較的最新版の書籍に通じ、医学・理化学・軍事・造船・航海・辞書を求め、蘭語のみならず英・仏・独各国語の書籍を購入しようとしている。和親条約調印後、宗城らはさらに海外知識を求め、「渴望書物」を入手しようとしている。この故に、大野昌三郎を始めとする人材の養成

の必要があったのであろう。このころ、宗城はしきりにゲペール銃の入手を求め、江戸における薩摩藩の150 封度砲の試射に、入江左吉・豊田俊蔵ら15 人を見学させている。

同年12月17日、宗城は明春の参勤上府に際し、3貫目玉銅筒1挺と鉄製車台1両、玉目3匁～4匁の鉄砲を携行することを幕府に出願している。<sup>14)</sup> 翌安政3年正月25日には、宇和島での12・20ポンドカノン砲の鑄造が好結果とされている。<sup>15)</sup>

安政3年(1856)2月23日、樺崎砲台の完成に伴い、宗城はその試射見分に行き、12ポンド砲は「敷板短クエ合悪シク故」2発のみ撃ち、その他80ポンド砲などは32発を撃って成功であった。<sup>16)</sup> 試射は26日にも実施された。これも成功とされている。3月1日には砲台横の御揚り場(埠頭)が完成した。<sup>17)</sup> 3月22日、砲台碑文が建てられた。<sup>18)19)</sup>

#### キ) 薩摩藩士田原直助らとの交流

安政3年3月11日、宗城は参勤交代のため宇和島を出発した。その御供頭取は松根内蔵であり、4月9日着府した。

この間、3月22日、藩内では御庄組久良砲台の番人から、薩摩藩の船が遭難し入港したと藩庁に連絡した。これは幕府が船2艘の建造を薩摩藩に依頼し、その船の警固軍船が17日夜の暴風のため藩領沖之島に漂着し、21日夜また暴風に遭い、深浦の漁船が水先案内をして深浦港に入港したものである。帆柱は3本とも折れていた。<sup>20)</sup> 4月11日、薩摩御用船から派遣された飛脚が薩摩から帰着し、大工頭らが来て帆柱を建てることになった。19日、薩摩藩士中島清六・田原直助・福島忠左衛門が来藩した。とくに田原は宇和島藩士に旧知あり、宇都宮九太夫が応対して、事情を書取にまとめた。その趣旨は遭難船に深浦で仮柱を建て、いったん国元に帰って修復したいので、材木・人夫賃金・船賃等は支払うというものであった。

宇和島藩はこの機会を利用し、旧知の藩士渡辺作之進・辻源七郎も応待させ、

深浦の造作場へ同行して業方修行することにした。5月2日、田原は藩が建造中の蒸気船を見学している。さらに宇都宮・松田源五右衛門は、薩摩で田原に大銃発射法を学んでいたのだが、技術が進歩し、とくに舶載砲の射撃は実地教授が必要として同行することになった。こうして、藩は多人数を派遣して薩摩の軍艦修復を見学させた。

田原直助（明章）は薩摩藩の造艦技術者・本草学者である。弘化3年以降、藩命により築城・造船の設計・監督に従事し、嘉永4年土佐出身の中浜万次郎に鹿児島で造船術を学び、安政元年に日本最初の洋式軍船昇平丸を建造した人物であり、宇和島藩士田原七左衛門家はその分家であるという縁故もあり、宇和島滞在中「宇藩出産考」を著している。幕府が注文したという軍船はこの型の船で、島津斉彬の在世中5艘が竣工している。<sup>21)</sup> 徳川斉昭から強烈な攘夷論の影響を受けた宗城は、その富国強兵論から生ずる開化主義は斉彬の模倣と思われるほどの影響があった。それは宗城の政治路線にも表れ、幕末に至るまで薩摩藩依存の体質を形成している。

軍艦の修繕はマストも本柱とせよとの斉彬の指示もあり、宇和島藩は船奉行と山方・船大工も協力させて、材木等の必要品も提供することになり、外海浦庄屋二宮市右衛門も協力することになった。そのための資材は、宇和島藩にとって莫大であった。材木の手配は5月22日に決定されて直助に通知され、薩摩からは税所五右衛門が従者・大工・木挽・鍛冶職17人を連れ、同月27日に深浦へ着き、修復工事を監督することになった。つまりこの軍艦修繕は薩摩藩と宇和島藩の旧知の造船関係者によって進行することになり、薩摩藩の技術は直接的に宇和島藩士らに伝習されることになる。7月28日、藩士土居頼兵衛が「西洋軍艦製作之儀ハ、御国ニ於テ太抵相開ケ、既ニ雛形迄モ出来得ル位之事ニテ、製作方ニ於テ最早格別疑惑モ之レ有ル間敷、殊ニ薩州侯御軍艦ハ西洋製作方未タ相開ケサル前御造立之事故、睨与扱ニ相成リ修行致ス可キ様之儀ハ之レ有ル間敷、然レトモ彼ノ藩製造乗前等、実地ヲ踏ミシ故、右等之处ハ研究之筋ニ相成ル可ク哉、慥カニ将来之御為ニ相成儀トハ存セサルニ付（○下略）」と意見を



述べている。つまり、造船理論は宇和島藩でも理解されていて、その上、薩摩軍艦は完全な洋式とは言い難く、宇和島藩の建艦事業の一助とはならないというのである。当時の情勢として、薩摩藩の方がはるかに先進的な開化政策を採用している実態について無智であるといえよう。実際にはこの軍艦修繕工事に、郡奉行比企藤馬・船奉行徳弘五郎左衛門・元締成田五郎七、山奉行望月三郎・田手次郎太夫ら多くの人物が関係するようになる。

軍艦の碇は、沖之島の海底に沈んでいたため、深浦に赴いた田原は土佐藩に連絡して搜索したが、発見するに至らなかった。また、この軍艦の積荷は、他の軍艦2艘に積み替えて江戸に輸送すると、田原から宇和島藩に届け、水主として御矢倉嘉蔵ら7人を乗船させることにした。

9月5日、田原について物産学の研究のため、先月から深浦に行っていた若松総兵衛が帰藩し、報告書をまとめている。9月に入ると、軍艦の修復工事はほぼ完成の段階になった。同月12日、藩は渡辺作之進ら工事関係者10人、外城下の船大工中を賞与している。この当時、宇和島藩の蒸気船雛形の建造も進行しているのであって、同月16日、田原七左衛門・大森忠左衛門が「ヒストン製法」、蒸気機具製造に関係している。20日、宇都宮九太夫・松田源五左衛門・徳久忠助は、軍艦の大銃打前見学のため、深浦に出張した。10月17日には軍艦修復も完成し、渡辺作之進らは帰藩した。21日には田原直助・中島清六・星山弥右衛門・福島仲左衛門は、江戸からの指令によって陸路江戸に行くことになり、軍艦には福島新次郎・長崎次右衛門・町田助次が乗り組み、天候を見て深浦を出航することになった。この間、江戸では、10月22日、宗城と世子宗徳は、海峯山における下曾根金三郎とその門弟による西洋流砲術調練の見学を、老中久世広周に提出している。23日、3,000人の歩兵銃隊の調練を、宗城はその隊列の中にまで入って巡閲し、その整然とした隊列に感動した。松根内蔵も随行していて、この見学は宇和島藩の練兵にも大きな影響を及ぼすことになる。安政4年正月5日には、宗城・宗徳・松根（図書と改名）は、江戸大森での島津家の大筒発射を見学し、下曾根ら3人の旗本も来て、大井の島津邸で斉彬に会っ

ている。

### ク) 在府中の伊達宗城

安政3年4月9日、参勤交代のため出府した伊達宗城は、側近の家老松根図書とともに、徳川斉昭・松平慶永・島津斉彬ら親藩・外様の有志大名との間で、直接訪問または書翰の交換によって、盛んに周旋活動を展開している。「稿本藍山公記」には、これらの事実が簡潔に記されているのみで、談合の内容や書翰そのものは記録されていない。書翰は「御書翰類」第二巻以降に別に編纂されているため、これによって、上記の3人を中心に、安政4年7月21日、米国総領事ハリスの下田来航に至る時期の攘夷派の動向を考察したい。

安政3年2月29日付斉彬返翰では<sup>22)</sup>まず、琉球(中山)問題に別条なく、8月下旬頃までには参勤のため上府することを伝えている。その上で、脇坂安宅らが蘭書所蔵を好まないように考えているとして、宗城に「御参府之上其御心得第一二奉存候」と教えている。この時期、斉彬は將軍家定と斉彬の養女<sup>あつひめ</sup>篤姫との結婚問題に集中していた<sup>23)</sup>。篤姫は周知のように、今泉領主島津忠剛女一子<sup>ただたけ かつこ</sup>である。嘉永6年3月、斉彬の実子として篤姫と改名、8月には江戸に赴いた。しかし、ペリー来航や京都内裏炎上などで婚姻問題は棚上げされ、安政3年正月、阿部正弘から縁組みが内達された。篤姫は7月7日、近衛忠熙の養女として名を敬子<sup>すみこ</sup>と改め、12月18日婚礼が行われた。斉彬書翰ではこの問題に触れ、「近衛殿厳敷被仰立、御養女本物と可致手段も可有之」、「且また今一条極秘之意味も申談し、家老同意ニ而申遣候事なから(○下略)」というように、斉彬は婚姻に慎重であり、また家定後の將軍継嗣問題も水面下で予想しているように受け取ることができる。徳川斉昭らの反対論のあったことも承知であろうが、斉彬は翌4年2月、大廊下下の間詰に家格が昇進し、継嗣問題の本格化を迎えることになる。その他は、黒田長溥がオランダ銃を多数購入し「馬上短筒」(騎兵銃力)を一揃い入手し、「遠望鏡」も1本入手しているという。薩摩の金山開発も「出金も可相増様子ニ而大慶いたし候」と伝える。軍事改革については、

西洋調練の推進、隠れ台場雛形の借用、「グラ―イバス」の試射について触れている。

同3年3月6日付慶永の「水越対談外三通、同時副書」によると、<sup>24)</sup>「水越対談」(斉昭と慶永)は、2月28日、江戸城中で両者が対面し、慶永は斉昭から幕閣が斉昭の登城や政治への介入を忌避し、「再如先年駒込へ押込、従公辺厳慎被仰出候様致掛、小子を押込、加え一橋迄も同様ニいたし度と専ら配意いたし、夫故か隠居之登営も近来は従 公義被仰出候迄は、先登城不為在候様ニて、其事ニ而今ニ御登城無之」と、宗城に知らせている。これは「全く高松(○水戸藩御連枝の一つ)姦計、井伊之黠謀ニも可有之哉」と推察し、一橋邸に行き相談するとしている。

安政3年に入り、反斉昭派の策動により攘夷派の発言は封ぜられてゆき、同時に井伊直弼らによる將軍継嗣問題での発言も顕然化してきたことが分かる。水戸藩の内訌問題もあり、慶永は水戸藩家老武田伊賀(正生、耕雲斎、若年寄)にも会い、水戸藩の安泰と攘夷派の結束を願う。武田も同感として、「大同小異也、私共時刻ヲ争ひ、今日ハ御咎、明日ハ如何と実ニ胸痛焦慮罷在候」と述べている。「巨姦之計算」は慶永・宗城にも及ぶとの認識がある。この件は斉彬にも伝えられ、斉彬は伊東宗益らの医師まで警戒するよう、阿部正弘が言ったという。井伊らは篤姫の入興と將軍継嗣問題の結合を心配し、攘夷派の連帯を妨害しようとしているのである。

「別紙之一」では、「花旗舶之渡来も商船而已ニして軍艦ニは無之」と、外交問題は安静とし、「カラーメルスエンソンムル氏地震説」を筆写のため貸与するとする。「川越(○藩主松平直侯、<sup>なおよし</sup>斉昭八男)は不相変勢宜、大ニ樂居候、阿州(○徳島藩主蜂須賀斉裕、公武合体派の有力人物)之光景者旧依然ニて御座候」とその動向を知らせ、斉昭をもって幕閣を動かせばその裨益大とし、斉昭・慶永・宗城の「鼎力」によってこれを推進するよう依頼している。また、「御家臣国手(○宇和島藩医某)の翻訳した『ヒュヘランド述治療書』は古い蘭法書であり、原書の誤訳が多いとしている。「其三 極密呈」では、改めて水戸藩の内

政問題に触れている。反斉昭派の家老結城寅寿は、藩主慶篤によって、同年4月25日に死罪となっているが、同派の谷田部藤七郎(通義、雲八、大嶺広孝二男)らは、同年正月25日に江戸を出奔し、高松藩主松平頼胤を頼って策動しようとした。結局、12月17日に東海道藤枝宿で水戸藩士住谷寅之介らに逮捕される。このことは、安政3年4月9日付宗城宛書翰では、もし宇和島領・土佐領に潜入した場合の逮捕を依頼している。<sup>25)</sup> 慶永・斉昭らは武田耕雲斎・藤田東湖ら深く依存していた。慶永は「極密呈」のなかで、強く水戸藩論の統一を希求し、さらに、篤姫の縁談の進行を期待している。

安政3年4月15日付慶永返翰では、<sup>26)</sup> 先祖秀康の二百五十回忌を福井で執行したことを、「以 幕朝之庇陰先祖法祀」を終え、「実以本懐不過之」と述べている。斉昭・慶永・宗城に共通する保守的思想を見ることができる。在国中の慶永に対し、宗城は慶永家臣中の有志の姓名を教えるよう求めたが、鈴木主税(慶永の近習役、橋本左内、中根雪江らとともに藩の柱石、同年2月10日没)、橋本左内を挙げ、橋本は近日帰国と告げている。

同年4月20日付斉昭返翰では、<sup>27)</sup> 「密答」として水戸藩内の反斉昭派の問題に触れ、一藩一和の必要を述べ、紀州家・尾州家の世子夭逝の問題に触れ、その藩政について、「一体の志為 皇朝夷狄を防禦し候義」を第一と考えている。その後嗣は「只天下の為ニ相成候人ニて 神祖(○家康)の御徳をけがし不申やう致度事ニ御座候」と述べ、時代の転換期における後嗣者の重要性を強調する。

同年4月27日慶永書翰では、<sup>28)</sup> 篤姫の結婚の内定を「実ニ為天下至幸無量、又可欣、可賀」と喜び、宗城に詳報を求めている。慶永は阿波藩・鳥取藩・川越藩を有志と考え、期待するところがあった。その周旋を宗城に依頼する。尾張藩は「実ニ駭然泣血之至」とし、田宮如雲(慶勝の側用人格、弥太郎)が当時参政として枢機に参画して、慶永は「実ニ一藩之人傑ニ而、忠節を尽し候由」と評価しているが、退黜されたと聞き、その真相の探索も依頼する。慶永は水戸・尾張両家のことは、「一家国之事而已ならず、天下之御手薄」にかかわると考えている。幕府が安政大地震の復旧費を諸大名に御手伝金として賦課すると

いう風聞について、諸藩の財政窮乏を招来し、「異舶防戦」の方策は立たないとし、斉昭ではそれについての幕府への周旋は難しいから、宗城が斉彬から脇坂安宅に建言させ、阿部正弘に手伝金の賦課を断念させようという。なお、下曾根金三郎の砲術、正弘から 1848 年製のゲペール銃 5 挺を貰い受け、城内で試射したところ、「誠以別格不及言語、筒之軽キ事ハ勿論、凡而精工」として秘蔵していると伝えている。来月下旬、泥原新保浦・三国海岸で、一大備（エーンバタイルロン）の兵員操練と大砲試射をして、撃攘の調練をするという。

同年 5 月 15 日付の慶永書翰では<sup>29)</sup> 宗城の江戸における政治活動を評価し、水戸藩内の「奸党」結城寅寿らの処刑と谷田部・大嶺の斬罪による藩論の統一を喜ぶ。宗城と斉彬の密話中に、阿部正弘に斉昭を厭うという口吻があり、斉昭夫婦を水戸へ移すという話を、「至大至重之艱難」とする。この幕政の事態を挽回する任は斉彬の外になく、斉彬にこの任に当たらせるのは宗城以外にないとする。慶永にとって斉昭以上の人材はなく、結局は「阿閣始之依頼も亦老公之外には無之」と断定している。慶永・宗城の思想はペリー来航不変だが、幕政の動向を左右するのは現在では薩摩藩にあるという認識が加わっている。「薩之薩たる、外藩（○外様）之豪雄富強、加之謀慮深遠、天下之疑懼する処にて、阿閣始之畏憚も此人ニ決し申候」と、斉彬に最大級の賛辞を与えている。つまり、斉昭の攘夷論と斉彬の開化策の結合によって、幕政再建の活路を見出そうとするのである。この観点から宗城に「一片之誠赤」を渴望している。

同年 5 月 20 日付慶永書翰では<sup>30)</sup> 徳島藩主蜂須賀斉裕が「月次五節句者着座」という城中座席になったことに期待をかけながら、同藩の滞府年限の延長が同藩の財政を圧迫することを憂慮している。慶永自身、参勤交代により軍事改革や政治活動に制限を加えられていると述べている。慶永らが参勤交代や手伝金の廃止等を訴えるのは、緊急の必要性があったのである。しかし、斉裕は慶永が期待するほどの攘夷論者ではなかった。

同年 6 月 14 日付慶永返翰では<sup>31)</sup> 「蘭製ペルキエツシーゲウエール<sup>則爆帽兵丁銃</sup>」の雛形の図を、宗城の要望があれば写本させるといっている。水戸藩の軍艦建造も

できたといい、幕府は君沢形船を作って下田へ回航させたと聞いている。<sup>32)</sup> 慶永は福井でも建造するという。バッテリー3艘の建造は命じていた。

同年6月23日斉昭返翰では、<sup>33)</sup> 藩士豊田彦次郎(天功)著「靖海策」(現今の急務に対する意見書、「海寇始末」「観世年表」と合わせ三部作を「靖海全書」という)を進呈する。同人著「北島志」「北虜志」も著述させたことを伝えている。「別紙」では、安政元年閏7月、スターリングの長崎来航、日英和親条約の調印について、鍋島斉正が大変立腹しているというが、その真情を知りたいという。さらにクリミア戦争中、英艦は長崎・箱館に入港し、軍事力で威圧し、拒絶すれば開戦に及ぶ考えであろうと推察する。これは「諸夷申合之上と被存候へハ」、弘安の役の比ではなく、「実ニ 日本の御大変」と考える。アメリカ・ドイツの大砲数の多さに対し、幕府・諸藩の製造は大震災の影響もあって実効はないと断定する。

同年7月9日付慶永書翰では、<sup>34)</sup> 米国船渡来の風聞は「近来絶而到舶無之」としながら、しかし、米艦は「其時不遠同国舶士官四五名可参と申たるよし」とし、もし米国軍艦が来航すれば騒動になるから、幕府は「振起鼓舞」する必要があると強調している。実はこの時、7月10日にオランダ理事官クルチウスは米使節の渡来を知らせ、列国との通商条約の締結を幕府に勧告し、7月21日に米駐日総領事ハリスは下田に来航、8月24日、幕府はハリスの駐在を許可しなければならなかった。慶永らの情報分析との間には差が存在した。同年2、3月に幕府が開設した蕃書調所・講武所について、前者は「いまた確定不致候由」、幕府も福井藩も同様に、蘭学を摂取して医学に止まらず、「分析学を始メ兵書等一切之学、追々相開き度と存居候得共、未たそこまでハ降り不申、焦痛之秋ニ御座候」と述べている。後者は「光景云々、追々勢宜由、欣然之至」としながら、実戦的でないと指摘している。慶永の軍事改革の構想からすれば、まだまだ旧弊が残存しているのである。先年、宗城は慶永に宇和島藩が反射炉を製造するといったが、莫大の経費が必要として断念した。福井藩も製造しないといっている。君沢形は1隻建造したいという。「如仰ライフル銃ハ一新器、何分御伝

聞も有之候ハ、御示諭希上候」といい、宗城が指摘するライフル銃の精能について情報を求め、日本製ゲッペル銃で、舶来の雷管を改良して使用したが、洋製の方が精巧としている。宗城は三国宿浦海口に砲台を建造するよう進言し、慶永はその見通しはないが、「コルテホウイッセル」は台場筒ではなく、「カルロン」も同様だが、5挺を近年中に製作するといっている。福井藩も宇和島藩も、同様に軍事改革は早急な進展をみせていないことが分かる。

安政3年在府中の宗城と帰国中の慶永の動向を考察して、攘夷派大名の実態をさぐろうとした。第一に、海外情報はオランダ風説書の系譜を引くオランダからの情報が多く、米英仏諸国からの直接的情報の入手は困難であったといえよう。また、オランダ兵書等の翻訳による造船・砲台築造・大砲鑄造は予想以上に難問が多く、欧米諸国の再渡来に対応できる軍事改革の成功は不可能であるといってもよい状況であった。そのことに気づき始めていた慶永・宗城らの対応は、さらに後述することにした。

#### ケ) 宇和島藩の蒸気船建造

村田蔵六が宇和島藩滞留中、伝馬船程度の擬洋風軍艦の雛形製作を行ったことは既述した。しかし、藩財政と造艦技術上の理由から軍艦の建造は中止され、宗城の大言壮語にも拘らず、ついに再開されることはなかった。しかし、鹿児島藩の造艦事業と長崎出島におけるオランダ軍艦の見学後、宗城は蒸気船雛形の研究・建造を具体化していく。

嘉永6年11月11日、藩では薩摩藩から届いた車船雛形をモデルとして、車船の大部分を完成させている。<sup>35)</sup> 翌安政元年正月、八幡浜浦の出身で宇和島城下裡町4丁目に居住した嘉蔵（のち喜市、前原巧山）が、本町4丁目の豪商清家市郎左衛門から「火輪船」の話を聞き、網曳用の轆轤ろくろから着想して「車輪船」雛形を作成した。これが宗城の目にとまり、御舟手大工が実用可能な車船を製作し、その「川船造の小船」の試乗に成功した。<sup>36)</sup> これによって、嘉蔵は船奉行支配下の御船方に任用され、蒸気船建造の実務を担当することになる。

安政元年3月、嘉蔵は須藤段右衛門の指示で、長崎の通詞本木昌造方へ「火輪船修行」のため派遣された。藩の御用達有田屋彦助（有田彦兵衛）方に滞在したが、本木は幕府に登用されていたため、彦助の祖父山本物次郎に学ぶことになったが、修行の目的は達成できず帰国した。

同年6月、嘉蔵は須藤・小船頭本庄忠兵衛・辻源七郎に随従して、「小蒸気船修行」のため長崎出島に行ったが、その小型蒸気船は出島の水門内にあり、ようやく1時間程度、蒸気機関を写図し、やがてその機関の据え付けと船内を見て、機関の要所が理解できた。

同年10月、嘉蔵は須藤・梁川荘左衛門・松田源五左衛門・村田蔵六らと長崎へ行き、今度は幕府役人、薩摩・肥前藩などからの多数の伝習者のなかに加わって、オランダ人と竹内卯吉郎から蒸気機関の伝習を受け、この時オランダ軍船（観光丸）に乗船でき、初めて西洋の文物に接して驚嘆し、「船帆前縄碇諸道具杯、夫々見物いたし、後蒸気機具を見候処、（○中略）実見ニ相成候てハ人間業とも相見不申」と述懐している。

安政2年12月には、嘉蔵は蒸気機関の木製雛形を作成し、宗城にも操作して見せた。翌3年正月、梁川・本荘・渡辺作之進や船大工が蒸気船の船体建造に取りかかり、10月に完成した。機関製作は喜市（嘉蔵の改名）・田原七左衛門が担当し、翌年冬一応完成させたが、実験は失敗した。そこで田原・喜市らは11月に鹿児島へ行き、気罐の製造の伝習を受けて帰国し、同5年2月からその改造に着手した。鉄の鑄形ではなく、銅板の使用によって完成した。同6年2月、船体に取り付けられ、宇和島湾内を周航した。巧山自身はこの小蒸気船を国製蒸気船と呼び、薩摩藩の梅田市蔵に次ぐ「日本第二番目の新機械蒸気船製造御成就」と述べている。

この巧山の蒸気機関の製作による小蒸気船は、宇和海沿岸の航海実験を何度も繰り返しているが、あくまでも雛形であり、貨物を運送するには不適の船であった。このことは、巧山も熟知していて、文久元年（1861）4月、将来の造船事業のために蒸気機関の木製雛形を製作して残そうとした。明治2年（1869）



12月～翌3年、藩は新造船所で、船長9間、幅1丈、深さ6尺5寸の船体を建造し、旧機関を全面改造して据え付けた。同3年10月、この船は初めて石炭を燃料として大坂まで航海し、宗城の観覧に供した。これが最後の成果であり、帰国すると水師場も廃止された。宗城は松根図書宛書状で<sup>37)</sup>この蒸気船雛形は、元来「専ら蒸気運用之妙可致試験為に」落成させたもので、「飛船」の代用のためでなく、もはや「無用之長物故」、「諸機具越破却し輕舸を鳥有」とすることを決定したと述べている。実用船とは最後まで考えられていない。

## B) ハリスの来航と日米修好通商条約の締結

### ア) ハリスの来航と攘夷派

日米和親条約の調印に至る過程で、幕府老中首座阿部正弘にはその対策について定見なく、さらに正弘の顧問徳川斉昭の観念的で現実の事態に対応できぬ攘夷論は、開戦必勝の確信も持ちえなかった。阿部の腹心筒井政憲（海防掛西丸留守居）・川路聖謨（海防掛勘定奉行）らは米国との交易論を持ち、その海防策の充実までは米国に対し数年間「ぶらかし」政策を採るという案に、斉昭も事実上同調せざるを得なかった<sup>38)</sup>。斉昭の建議「海防愚存」「十条五事の建議」は、紙上の空論であった。現実に関した浦賀奉行戸田氏栄は、通信・交易の許可と制度改革、防衛策の確立を説いた。さらには福岡藩主黒田長濤のように、鎖国体制を止め、諸外国と通商すれば富国強兵につながるという考えもあった。一般には避戦と限定的通商を認める傾向にあり、伊達宗紀も日本の独立独行のためにはそれがよいとしている。条約の内容は鎖国体制を打破するものであり、通信（国交）と同時に、日本列島の下田・箱館等の諸港は、米国の主要な要求である中国市場への進出のための寄航地となり、他日通商開始の伏線も条項として存在した。さらに、英・露・蘭諸国との和親条約の調印は、幕府役人らを始めとして富国強兵のための通商論を公然化させていく。条約調印から18ヵ月後には、下田に米国領事の駐在が認められていて、その時点でさらに新しい時代への転換が予想されるものであった。したがって、斉昭・慶永・宗城らの攘

夷論は客観的には自滅する方向に突入していたということができよう。幕府に攘夷論を国是とさせる時代は過ぎようとしていた。阿部正弘も開国政策へ転換し、内政改革も「海防局」の設置案（実現せず）、さらに大船建造の許可、講武所・蕃書調所の創設、品川砲台の築造、人材登用等の方針となる。

安政3年7月、オランダ理事官クルチウスは、英国使節ボウリングの来航、クリミア戦争後、欧州諸国の対日通商要求は必至となってきたことを幕府に知らせ、列国との通商条約締結を勧告した。長崎奉行川村修就は目付永井尚志・岡部長常とともにクルチウスと会見した。この3人はクルチウスの勧告を受容し、幕府に国益として交易の免許を上申している。クルチウスは自由貿易が幕府に認められないと、従来の商館貿易における「協荷商法」を拡大し、「仲買商法」を認めさせて、事実上の自由貿易を実現させようとした。

8月4日には、阿部は英・米・露・仏4カ国ほかからの通商要求を考慮に入れ、交易互市による利益を富国強兵の基本とし、時勢に順応する方針を出した。幕府は貿易を将来の国策としたのである。10月17日、老中堀田正篤（正睦）が外国事務取扱を命ぜられた。

英国使節ボウリングの来航は、アロー号事件の発生によって延期された。この間、米国総領事ハリスが、通商条約締結の使命を帯びて、同3年7月21日、下田に入港した。ハリスは下田奉行井上清直・岡田忠養と会見し、ついに玉泉寺を総領事館と定めるに至った。

既述のように、この間、斉昭ら攘夷派大名は、藩論の統一、有志の糾合、軍事改革に懸命になっているのだが、各国との和親条約の調印によって規定された国際関係が、どう展開していくのかという視野に欠け、また海外情報の収集も不十分であり、有志の結束による幕政改革の構想も、しだいに後退の姿勢を示すばかりとなっていく。

安政3年4月段階、宗城は慶永宛に、水戸藩内の結城寅寿らの処分と高松藩への対策、阿部が「実ハ老公（○斉昭）最早御登宮無之方を望み」と知らせ<sup>39)</sup>堀田正睦・井伊直弼・松平頼胤が斉昭夫婦を水戸に移す策謀をしていると憤慨し

ている。このころ、宗城の側近吉見左膳が諸藩有志間を奔走しはじめている。翌年の宗城・松根図書の参勤帰国の準備にそなえ、吉見の江戸での活動が始まる。また、一橋慶喜の政治活動も散見される。

同年7月24日付慶永返翰では<sup>40)</sup>まだハリス来航の報知は見えず、水戸・一橋家の閨閥問題に関する風評が中心で、それもその風評により「方今 天下依頼之人」である斉昭の一身上の問題が「厖堂万一一時之過失ニ而」厳咎があれば、「天下土崩之形勢」となることを恐れるのみである。

翌8月7日付慶永書翰では<sup>41)</sup>薩摩藩の伝信機2個の作成について、福井藩では1個作成したとつげ、江戸では斉彬と宗城の交流がはなはだ密接な関係にあり、宗城も斉彬から見せられている。この書翰で、初めて「崎港蘭国蒸気船(○7月8日、蘭軍艦メデュサ号入港、艦長ファビュス)及リニー船渡来、英国三十船渡来(○ボウリング渡来の件)云々御注進申上候儀実説ニ候哉」と、宗城に正確な情報を求めている。「ホンブラント述タクチーキデルデリーワーペ子ンス 則三兵答古  
知幾之原書」の直訳に成功し、坪井信良訳「エールステベキーンセレンデル子ーデルドイツセタールキュンスト」を上梓し、一部献呈すると述べている。

同年8月18日付斉昭書翰では<sup>42)</sup>「靖海全書」を宗城に見せることを約する。「別紙」では水戸家内紛には触れ、対外問題については、米国領事の来航について、「下田も十八ヶ月云々と申節ハ、長き様ニも被存候へ共、いつか相立来り候処、御備向等ハ以前ニ相違も無之候へハ、只口上ニてのミ応接致候半故」と述べ、来航の事実は幕府から知らされておらず、「夷人思ふ様ニ不致ハよろしくと心配致候」と述べている。斉昭自身、すでに外交の第一線で活動する立場にないと自認しているようである。

8月24日付慶永書翰では<sup>43)</sup>宇和島藩の樺崎砲台の図画が届いたことと、福井藩の宿浦砲台との比較をしている。また、幕政については斉彬と宗城の協力による周旋に期待している。「麟兄周旋依頼外無之」という。さて、別紙で「下田へ去月廿一日、又花旗国舶一艘到来」と、初めてハリス渡来の事実を確認している。その目的は、和親条約第11条に関する交渉と推定されている。幕府が

アメリカの随意になることを恐れている。この段階で、蘭軍艦メデュサ号来航以来の諸外国の実態がほぼ把握できたのであろう。

同年9月11日付慶永書翰では<sup>44)</sup>「此度ハ此機会ニ被乗、於麦堂(○幕府)因襲之流弊御洗除ニ相成、真ニ修攘之道相立候様希度儀ニて候」と述べる。諸藩の財政窮迫を問題とし、参勤交代を緩和し、大名の妻子を国許に帰して江戸での経費を節減し、困窮救助・士気振興の上で、三兵操練もでき、弊政改革も可能と従来の持論をくり返している。「徒ニ大炮鑄造、歩兵練習候ても、却而無益之事ニ可相成哉」と心配し、当時の大風による米・材木等物価の引き下げの必要を説く。蘭軍艦のもたらした英軍艦30隻も渡来情報は、阿部正弘からも慶永に知らされている。英国女王は和親条約を不満として、「撰拳ニ而使節(○ボウリング)指越、改而条約勝手俛ニ取結度所念と存候」と認識している。この英国の通商条約締結の圧力とハリスの下田駐在を、「永世之巨患」としさらに詳報を宗城に求めている。別紙(1)では、幕府の西洋銃陣への再編成は、下曾根金三郎に任せていたのでは、「純粹之西洋銃隊とは難参事かと奉存候」として、天保末年からの軍事改革の基本路線に疑念を抱いている。部隊編成の用語も蘭語はやめ、日本語に改正する、例えばゼネラルは「指揮惣軍之大将ゆへ、老中杯ニ被命候ハ、」軍制改正になる。しかも、幕府軍制に止まらず、諸藩主もこのように西洋銃隊に改編しなければ、「慶元(○慶長・元和)之旧制」、「僻遠井蛙之士民、区々之議論」の認識は変革できぬと、宗城と同一意見を示している。

同年10月6日付慶永書翰では<sup>45)</sup>老中首座堀田正睦のもとで、建議を無視され続けてきた斉昭は、ハリスの下田駐在以後は登城もせず、幕政参与も名目のみとなっていたが、慶永は「麦庭有司大俗吏多キ故」、「当今洋夷応接を始、千条万務萎弱之弊害ニは不相替泣血独費之事而已ニあらすと奉存候」と、斉昭の身上を案じている。「今度者実ニ皇国之興廃征夷之存亡分判之秋」と、外圧の強化、通商条約調印容認の動向を評価しながら、「小子更ニ尺寸之愚衷も無之」と述懐している。この時点で、慶永は「一刻も早くと存候事ハ、西城立太子之事件ニ御座候」と、始めて将軍継嗣問題に触れ、この件は斉昭に相談すると嫌疑

もあるので、尾張藩主徳川慶恕に呈書したと伝えている。一橋慶喜を「当今と相成候而者、英敏之梁公（○橋公）をして立太子ニなさしむる外無他事候、貴兄（○宗城）ニも尚又夫々枢紐当路之官吏へも極密御示し置被成候方可然奉存候」と、幕閣内有志への工作を依頼している。本来的には異質であるはずの通商条約調印問題と將軍継嗣問題が、極秘のうちに構想されてきた。建儲問題なくしては「危殆之時態」を克服できないと、慶永は考えるに至っている。10月27日付の慶恕返書では、「機会之当否ハ第一事、隔地ニ而猶以難及候間、東行之上篤と驚力を尽し申度存計ニ候」と、慎重論を述べている。

同年11月5日付慶永書翰によると、<sup>46)</sup>「幕堂至密之時景、且英夷委曲之事情、水老公之光景、凡而不得評悉」と記し、宗城らからの情報は杜絶しがちであったことがわかる。斉彬の養女篤姫の江戸城入り（11月11日）、これも本来は無関係のはずの建儲の件について、近く参府予定の徳川慶恕と面談し、慶恕を同意させるよう周旋を願っている。

同年12月26日付慶永返翰によると、<sup>47)</sup>8月に江戸で発生した安政大地震を凌ぐといわれた大風雨洪水・地震により、江戸城をはじめ船舶・砲台が破損し、「天下之衰弊ニ而恐入申より余言ハ無之、嗚呼之嘆息、連歳之事ニ相なり、絶言語申候」と歎息する。また、「ボーリング十余艘渡来可致旨、段々垂示之趣ニ而拝承」と、アロー号事件の発生状況等については、正確な情報を得ていないことが分かる。「米利堅之使節」の江戸近海渡来と合わせ、「佐賀仕切船」の防禦ラインを突破して上陸され、通商免許に至ると考え、斉昭・宗城・斉彬の「英明卓然深密謀慮」に期待している。この書翰に付された慶永作成の文案は、攘夷派大名の認識を代表していると考えられるので引用しておきたい。

大貌利太尼亜之女王ノ使節ニ諭示ノ文

大貌利太尼亜之女王より今般使節を被相立、軍艦三隻を幫帶して我肥前国長崎港ニ渡来せる事ハ、日本国主へも其段夫々之官人より相達候、今般之願望者、昨年冬女王之使節と深密相議して、已ニ条約書を渡して二港を許す所尤明白也、二港者已ニ箱館本港ニ限る、然ル処女王之意、下田港を免許させる事を憤発し、使節を罰黜して新撰之使節をして石本港ニ至り、魯墨之二国へ三港を約して、英国ニ二港而已を許すこと、於理なき所なり、是非ニ三港

ともに許して、日本英国両商交互通有無度欲する也、加之將軍之祖先迄ハ、如今鎖国之禁なくして、英人毎度舶を渡す、且駿河国へ来って謁すること、史冊ニ歴々たり、其上朱印を賜ふ、英国謹て今ニ伝へて把持す、現ニ芸祖の朱印を子孫ニ至り擲却すること、其理なきところなり、乞、従今朱印之表を取用ひ、両国永世不朽之親睦を専らとすへし、下田港杯ハ勿論免許すへし、此儀ニ於て違背する儀も毫もこれあらは、芸祖之朱印を返へすへし、加之、兵威ニ畏れ、二百余年前、通好英国之懇願を廃墜して、新ニ通好、墨奴魯国ニ親ミヲをなすこと、於宇内其罪不許所、塵戦すべしとの申立、一々其理尤なり、日本国王是を聴て、英国之建言允当せりと感服す、素より昨年二港を許すことハ、有志と使節等議する所なり、日本帝是を本意とせず、幸ニ使節再ひ至于本港前件を建言す、花旗魯国へ許す下田港者、英国にもこれを許すへし、しかれとも我長崎ハ古来より之待諸国所ニして、侯伯これを守る、尤最大節制を嚴ニすへき所也、然ルを女王之意ニハ不出とも、使節侯伯之守衛船を蔑視して乗込、剩内港ニ入ることハ国法不許ところ、夫をも輕蔑して云為之挙動をなす、於王法可必討、況ヤ守衛士英国舶乗込之為ニ破没せられる、日本帝深くこれを思へは、下田港を許すことハ敢不惜といへトモ、英国日本国法を最大ニ謹守して輕蔑之状なく、再謝前罪して内港之船を外ニ出して乞ふへし、然らハ我国法を守に似たり、議して下田港の事をいひ、其外建言を議すへし、此段女王へも使節より申聞候て、以後ともに不法挙動之状なかるへし、万一条約候ても、我彼と議するニ就而違犯あらは、彼より我を責むへし、英国我法を違犯すれば、条約不殘可擲、却若又英国之人我法ニ違へハ英国是を罪し、我人条約違ハ、我国人を罰すへし、呉々今般之挙措大過失ハ、日本帝震怒すれとも、如海之量を以て平和ニなす。英国使節難有奉存、前件之通り仕切船外へ舟を出し、上陸も不可仕、将官と議して和談之後ハともかくもすへし

長崎奉行

英国使節へ

以上の文案のなかで、慶永は開戦を回避するため、最恵国待遇を認めて下田を開港し、領事裁判権をも認める考えを持っていたことが重要であろう。英国軍艦の長崎入港の風評が、攘夷派大名の領袖を震駭させている。慶永はこの案文によって、使節は畏服し日本の国法を遵守し、「神州之武威」も示し得ると宗城に述べている。

慶永は次の幕府への「陳奏」を示す。(1)「我より矢張如清国通商之外当今無見詰、英へハ何程、墨蘭魯黄旗仏独乙杯被相渡候品之多寡等、兼而定額被相立」と、欧米諸国との定額だが広域の通商を認め、「日本之国禁をも御破り候而も可宜」と、富国強兵策のために従来の姿勢を大きく変更している。(2)「右様絶言

語候光景ニ而者、当今之閣老参政ともに肉食而已ニ而役ニ不立」、「水老公参謀治乱之総督」に任命する。(3)一橋慶喜をもって建儲とし、「天下之人心を安堵」させる。(4)天下の諸侯を分けて、海陸之二軍を定める。以上の四項を宗城から徳川慶恕を通じて幕府に建白する。

「別白其二」では、下田から帰府した岩瀬修理（忠震、伊賀守・肥後守、10月外国貿易取調掛となり、幕議を通商論に傾けさせる。井上清直とともに日米修好通商条約交渉の全権となる）のハリスとの交渉の経過を伝えられている。ハリスは明言を避けているが、ボウリングの渡来を待って「万事変革大懸り可相成」考えと受け取られている。さしむき10カ所程は開港、交易は勿論商館も建設され、開港も第一に大坂、長崎の模様により江戸での外交交渉も行われるであろう。ハリスの通商条約交渉のための出府の要望は、ボウリングの渡来と通商条約調印の要求という情報によって裏付けされ、強化されていることが分かる。

実は「鎮西へ英夷軍艦三隻渡来、尚使節ボーリング十余隻ニ而後渡可致」との情報、宗城の11月16日江戸出立の飛脚による内書に記されている。<sup>48)</sup>以下、慶永の意見と宗城の意見とは基本的に同一であり、一橋慶喜擁立論に宗城も賛同している。12月付の宗城内書では、<sup>49)</sup>「幕堂至密之義ハ見聞不仕候処、追々要路諸吏へハ貿易被相始候旨密示有之候処、条約等ハ一局之評義も無御坐様子」と知らせ、その原因はキュルチス（ドンケル・クルチウス）の案稿にあると推察している。井戸覚弘（対馬守、大目付）・跡部良弼（伊賀守、江戸町奉行）らは「交易産物品を世話いたす義」と考え、岩瀬は「此人ハ著眼も粗有之、存込も宜敷、如本邦封建之製度<sup>ママ</sup>海外に無御坐故、交易御ゆるしと相成候而も、此処御反正なくてハ、内治之工夫相違致候間」と、宗城に通商条約の調印によって、日本が世界資本主義体制内に取り込まれるならば、封建制の改変という内政の根本問題にまで踏みこむ必要を説いている。現状のままでは、貿易の利益は幕府の独占に帰し、諸侯の財政再建、富強は期しえないと考える。忠震は幕末における幕府独裁制と諸藩の分立制は両立しえないことを見抜いている。しかも、

「諸夷通商御免云々ハ、不容易、乍恐征夷之御重にハ御不似合と、当今後世御背名も奉唱も、亦感服奉美唱へきも此一事ニ帰し」と、朝廷による幕政委任論に立って、幕府の独断調印論を牽制している。また、諸藩の富国強兵策が成功しなければ、「逆も御国威振興ハ不仕義」と考え、問題は「天主教一条」にあるとしている。岩瀬はハリスとの接渉を通じ、キリスト教に対する理解を示し始めている。なお、宗城は大久保右将監（忠寛，一翁，当時蕃書調所頭取）からも、岩瀬同様の話を聞いている。

岩瀬は下田駐在のハリスから、ボウリングの渡来とその目的を聞いて、交易・開港の意志を固め、通商条約締結に向かって動いた。ハリスは、同年9月27日、書簡を幕府にあて、大統領ピアースの日本皇帝（将軍）宛の親書を手交し、通商条約交渉のため出府することを求めた。その締結がボウリングの武力行使を制約し、英国への屈服を免れ、貿易の利益が幕府・民衆にもたらされるという友好政策論を説いた。この折衝は1年余も継続されることになる。この間、安政4年（1857）閏5月5日、下田で日米和親条約の改訂にあたる日米協約が調印された。(1)下田・箱館両港のほかに長崎を開く。(2)下田・箱館への米国人の居留と副領事の箱館駐在。(3)米国貨幣は同種の日本貨幣（金・銀）と同重量で交換し、幕府が6%の改鑄費を徴収する。(4)領事裁判権の容認。(5)三港へ寄港する米国船は、必需品の獲得または破損修理のため、代価を金銀貨幣あるいは品物で支払う。交易は自然拡大する。(6)米国総領事は7里四方の遊歩区域外に出る権利を持つ。以上によって、ハリスは出府以前に外交的勝利を収めた<sup>50)</sup>しかも、慶永・宗城らの先述の見解からみると、これらの条項は外圧の緩和という視点から、許容の範囲内であったと考えられる。

同年2月1日、オランダ理事官クルチウスはようやくアロー号事件を長崎奉行に知らせている。事件は第二次アヘン戦争として展開し、英仏連合軍はしだいに勝利を収め、1958年6月には清国は露・米・英・仏との間に、最恵国待遇、開港、公使駐在、賠償支払いなどを定めた天津条約を調印した。6月17日、老中阿部正弘が死去、7月20日には徳川斉昭の幕政参与の辞意が認められてい



る。

7月24日、老中首座堀田正睦は、御三家・両卿・溜間詰大名（譜代）に対し、ハリスの出府・登城・謁見の許可を伝え、「世界之形勢変革及ひ候ニ付而は、御国ニおゐても寛永以来外国御取扱向之御制度御改無之候而は相成間敷」と、幕府は事実上鎖国制度の廃棄を宣言した<sup>51)</sup> 26日、溜間詰大名はこれに反対を堀田に建言し、続いて大廊下詰・大広間詰大名も同様に建言した。これによって、国内政局はさらに複雑な過程を辿ることになる。

さて、伊達宗城の動向にかえろう。安政3年4月の参勤上府以降、宗城はとくに島津斉彬と緊密に面会し、福井在住の慶永とは密接な往復書翰によって情報と意見の交換を行ってきた。しかし、軍事改革、艦船・砲台・洋式軍制が意のように進まない状況では、その持論である攘夷という対外強硬路線も、非現実的なものになっていった。むしろ、富国強兵のためには、通商による利益が諸大名にももたらされること、そのためには幕府専制を掣肘することが必要になる。

宗城は、安政4年4月5日、江戸を発駕し、松根図書以下が随従して、5月1日に帰国した。閏5月13日、騎馬隊練習、野戦銃30発を馬上で試射したとの記事があり<sup>52)</sup> 歩騎砲三兵の訓練は実施されているが、画期的な進歩は見られないようである。同月26日には三島山下で、野戦銃400発を標的までの距離80間で試射し、宗城は阿部正弘からもらった兵丁銃3発を試みている<sup>53)</sup>

同日、桜田久左衛門が奥鉄砲頭、宇都宮九大夫は大坂留守居元締兼帯、福島藤兵衛は鉄砲頭に任命されている<sup>54)</sup> 宇都宮は威遠流師範を免ぜられたのである。この日、宗城は目付をもって、諸流砲術を不易流小銃を除き、威遠流砲術に統一すると命じている。騎兵隊の訓練はたびたび実施されている。

安政4年5月帰国以降の宗城については、「稿本藍山公記」巻88以降、編集方針が変化したかのように、その対外交渉に関する記事が減少し、書翰等も「御書翰類」「昨夢紀事」によらなければならなくなる。一つには、将軍継嗣問題からする宗城の政治活動に関する圧迫があり、藩内では威遠流砲術・軍艦建造等

の条件不整備の状況が露呈しはじめることが考えられよう。

安政4年6月11日、樺崎砲台で80封度・30封度・18封度・12封度砲計20発を試射し、「其成績至極良好」とされている。12日、威遠流師範に松田源五左衛門・桧垣弥三郎が任命されている。14日には、防州徳山にいた金剛山大隆寺前住職の晦巖から長州の地震の情報がもたらされている。徳山藩主毛利元蕃の菩提寺は大成寺、晦巖と元蕃は親交があった。7月13日、築地講武所内の軍艦操練教授所の開設が幕府から知らされたが、藩内からの派遣はなかった<sup>55)</sup>

同年8月5日、15騎の騎馬隊練習、西洋銃隊の着具操練を宗城が見学している。この軍用馬は斉彬から供給されている。馬役浅川信太郎は師匠玉置平兵衛に対面のため、鹿児島へ派遣された。16日の操練では、騎馬15騎、大砲4門、歩兵46人の三兵調練が実施され、これが西洋陣形の最初と考えられる。19日には宗城がゲベール銃15発を発射し、4寸角の標的に12発を命中させている<sup>56)</sup>

同年9月2日、宗城は騎馬隊とともに横吹に行き、小砲・威遠流大銃15発を試射した。14日には「和蘭風聞書」を調べた。17日、幕府から「阿米利加官吏」

(ハリス)の出府・登城・目見の通達があり、宗城は「実ニ痛難、切齒、言語同断」に感じ、暫くは黙坐、呻吟した。このころ、宗城は御庄組鹿島における大規模な演習(狩猟)を計画し、須藤段右衛門が事前調査している。蕃書調所出役の村田蔵六に銀3枚が下賜された<sup>57)</sup>

10月朔日、宗城は外海浦を拠点として鹿島に渡り、和蘭製二連発銃で鹿を射とめた。翌日、松根図書を供に渡海し、一番山鹿垣、二番山・端山鹿垣で射撃を続け、二頭を獲た。この日、総軍で49頭を射止めている。3日は風化のため、船越から緑村に出、船越に帰って乗船し、垂水鼻で桜田主水に大猿一頭を打たせ、久良砲台に上って、その夜は緑村庄屋(尾崎)宅に宿泊した。4日、御庄焼窯元を見学、土佐領との境界の松尾坂へ出て土州小松島を眺望、5日に篠山へも登山し、頂上の矢筈鼻(池)から望遠鏡で四界を観察し、6日に帰った。

9日には米使登營に関する幕府の通達が届いた。9月19日、仙台藩主伊達慶邦・宗城の世子宗徳<sup>むねえ</sup>ら一統への書状で、登營の趣旨について、松永慶永・慶邦

ら10人の連名で、正睦にハリス来航以来の経過、米国大統領の書翰の内容等について質疑し、幕閣は「外ニ平穩之良策も無之、此処（○ハリス登宮）ニ一決相成候由」といったが、事態は国際的にも重大であり、「御返答之御趣意者、被仰出候以前ニ拝承仕居度奉存候」と求めている。<sup>58)</sup>

11月朔日には、ハリス提出の書翰和解写が順達されることになった。6日には長崎での通商仕法が改正され、箱館でも交易が許され、ロシア等条約調印済みの国々にも適用されとの順達があった。10日には慶永の周旋により阿部正弘に依頼していた「六響短銃」が宗城に届き、護身銃として秘蔵された。11日には斉彬から「騎馬隊調練図」が回送され模写した。21日、城内三の丸馬場で、馬数19頭の騎馬隊訓練が実施された。22日、薩摩藩士田原直助が近く来藩することになり、桧垣弥三郎が応待することに定められている。24日、米国からの書翰和解、ならびにハリス謁見時の「口上之和解書」が届いた。大統領フランク・ピールセ（ピアース）の書翰には、日米和親条約の改訂、通商条約の締結の要旨が記述されていた。「口上之趣和解書」で、ハリスは「此良キ目当ヲ遂ル迄、慥ニ予カ丹誠ヲナスベシ」と結語されている。宗城はこれを読み、ハリスに対する待遇の依頼であり、「重大事件ニ非ズ」と理解し、謁見は潜越の行為と憤慨した。<sup>59)</sup>

宗城の帰国中に、事態は日本修好通商条約の締結と将軍継嗣問題が、しだいに結合して考える方向に動く。そのなかで、攘夷派大名はむしろ後者に重点を置いて、幕政への介入と政局の転換を考えていたように思われる。

#### 注

- 1) 「藍山公記」巻69, 18～23丁
- 2) 同 同 , 41～50丁
- 3) 同 巻70, 4丁
- 4) 同 同 , 6～9丁
- 5) 同 同 , 18丁～
- 6) 同 同 , 39～43丁

- 7) 同 同 71, 21~24 丁
- 8) 同 同 72, 12~16 丁
- 9) 同 同 , 17 丁
- 10) 同 同 73, 7 丁以下参照, 詳細は省略。
- 11) 河内八郎『徳川齊昭・伊達宗城往復書翰集』329 ページ。
- 12) 「御書翰類」第1巻所収
- 13) 「公記」巻74, 7~22 丁
- 14) 同 巻76, 36~38 丁
- 15) 同 同 , 46 丁
- 16) 同 同 , 40~41 丁
- 17) 同 同 78, 47~48 丁, 安政3年
- 18・19) 3月22日, 樺崎砲台碑が, 二宮和右衛門(長兵衛の父)によって建設された。現在その碑文は破損のため全文は読めないため, ここに掲げておく。句読, 注は筆者。

樺崎砲台碑銘并序

自我 義山公(○藩祖秀宗)始受封于此地, 世々相承, 文教武備以化誘其民人至今, 之 公  
(○宗城)益弘而大之鼓而舞之, 以誘其心作而興之, 以奮其氣, 於是乎, 挙藩之士文武彬々,  
各有所就焉, 先是

幕府命沿海侯伯嚴防備, 以洋夷

公思所, 以奉

幕府之志, 而藩屏

王室往年造砲台於封南之御莊, 而近海之防未盡嚴也, 又欲造砲台于樺崎, 會有地震之變, 民  
力疲<sup>(ママ)</sup>弊 公乃大賑恤之, 而砲台之舉則將熄焉, 二宮在明窃慨 公志之不遂也, 請以家資  
造之

公嘉其志許之, 令宇都宮綱敏松田常愛司之, 一倣西洋造築之法, 在明以備前石匠多吉郎為  
役長, 以安政二年乙卯三月興役, 以十二月畢功, 嗟夫十閱月之久, 風雨寒暑之苦, 綱敏與  
常愛, 無一日不往督其役, 可謂善勤于公者矣, 在明之不吝家資出, 以保國家之用, 可謂善  
用財者矣, 然而非

祖宗與

公之澤入, 人之深而感人之厚, 安能致人々忘身奉公如之盛哉, 在明請通孝銘曰

悍彼洋虜譎詐百端, 恃其銃砲與其船憧々往来, 掠我海辺東西出沒, 年甚一年曰魯西亜, 曰  
米利堅, 曰暎咭利, 其徒寔繁何以御之, 一猛一寬, 不治之治, 王者行焉, 既許互市使彼知  
恩, 又嚴防備使憚而虔, 樺崎之地在鶴城側, 其鬱葱其海深碧, 測而量之可通夷舶 公曰我  
封豈容奸慝矧, 茲近要須申戒飾, 既相其地既計其役, 異<sup>(ママ)</sup> 災民其舉或熄, 有臣在明, 思報  
公德, 苟益于國家資何惜, 請而見許爰致其力, 玉月之山遊子之洲, 其土其石運之以舟, 無  
風無雨無夏無秋, 叔目之幹之苟安是偷, 綱敏前唱常愛後酬, 不同不送一心, 而謀截山填海

築之為丘，役使有法衆口不咻

公曰勿亟，豈敢優遊 公曰休之豈敢少休，穹窿砲台賊所畏避，扼賊衝路，其欲不恣，砲門有蔽眼眩心悸，縱使來有敬無二，砲台之成益嚴，其備敦其守之有臣如鷺 公誘之文進之于義 公勸其武益大，其器倔強何益一鼓可斃，謂之不信視其政治

安政三年丙辰春三月

本藩文学金子通孝撰

通孝は通称孝太郎，魚洲と号す。藩学明倫館教授として水戸学を鼓吹した。

- 20) 「公記」巻 78・79・80・81・82・83・84・85・86 参照
- 21) 『国史大辞典』，池田俊彦『島津斉彬公伝』383～389 ページ。
- 22) 「御書翰類」第 1 巻 同年月日条（以下略）
- 23) 芳即正『島津斉彬』190～199 ページ
- 24) 「御書翰類」第 1 巻所収
- 25) 河内八郎，前掲書，340 ページ
- 26) 「御書翰類」第 1 巻所収
- 27) 同 上
- 28) 同 上 第 2 巻所収
- 29) 同 上 同 （二通之内一）
- 30) 同 上 同
- 31) 同 上 同
- 32) 君沢形は，下田で破航し沈没したプチャーチン乗艦ディアナ号の帰国用代船が伊豆国君沢郡戸田村において，ロシア人の指導下で江川坦庵の手の船大工がスクーナー艦を建造したものをいう。国産スクーナー船（純帆船）は，合計 10 隻建造された。藤井哲博『小野友五郎の生涯』47 ページ参照。
- 33) 「御書翰類」第 2 巻所収「密書共二通」。河内八郎前掲書，342 ページ参照。
- 34) 同 上 第 2 巻所収「別紙共二通」
- 35) 「藍山公記」巻 51
- 36) 三好昌文『前原巧山』（『愛媛の先覚者』2 所収）三好他『前原巧山一代断』（巧山の自伝）『宇和島・吉田旧記』第五輯（榑佐川印刷所刊）
- 37) 三好『松根図書関係文書』（『宇和島・吉田旧記』第七輯）125 ページ
- 38) 石井孝『日本開国史』77 ページ以下参照
- 39) 『昨夢紀事』4，439 ページ～
- 40) 「御書翰類」第 2 巻所収
- 41) 同 同 「密白二通共」
- 42) 同 同
- 43) 同 同

- 44) 同 同 「別紙二通」
- 45) 同 第3巻所収
- 46) 同 同
- 47) 同 同
- 48) 『昨夢紀事』五, 48 ページ
- 49) 同 五, 58 ページ
- 50) 石井前掲書, 228~231 ページ
- 51) 同上 , 236~239 ページ
- 52) 「公記」巻88, 同月日条
- 53) 同
- 54) 同
- 55) 以上 「公記」巻89
- 56) 以上 同 巻90
- 57) 以上 同 巻91
- 58) 以上 同 巻92
- 59) 以上 同 巻93